

## みどりの指針の役割と使い方

1. 共通認識の形成：まちづくりに携わる多様な主体が、目指すべき方向性を共有する
2. 創意工夫の実践：自然のチカラを最大限に引き出すための工夫を、それぞれの活動に取り入れる
3. 考え方の定着：地域全体にグリーンインフラの考え方を浸透させ、持続可能なまちを実現する

### 3つのみどりの指針

#### 1. みどりのチカラを上手に生かす指針

(グリーンインフラ指針)

- 1) 健全な水循環を支えるみどり
- 2) 都市の気温上昇を緩和するみどり
- 3) 地球温暖化の緩和に貢献するみどり
- 4) 生き物の生息空間となるみどり
- 5) まちの景観・郷土の風景を形成するみどり
- 6) 暮らしに息づく農業活動の場となるみどり
- 7) 健康づくりの場となるみどり
- 8) 身近な遊び場となるみどり
- 9) にぎわいや交流の場となるみどり
- 10) 防災拠点となるみどり

#### 2. みどりを支える仕組みの指針

(グリーンマネジメント指針)

#### 3. みどりの魅力を楽しむ指針

(グリーンプロモーション指針)

みどりの取組・地域別の取組

# (1) 健全な水循環を支えるみどり

## 基本的な考え方

- ◆ この指針は、まち全体が雨を優しく受け止める大きなスポンジになることを目指すものです。雨水をゆっくり地面にしみ込ませることで、地下水を蓄えながら、水害を防ぐ健やかな水の循環を育てます。
- ◆ 湧水につながる涵養起源<sup>23</sup>を含めた台地全体で雨水を浸透させ、都市型水害を緩和させることが大切です。一方、低地は雨水を一時的に貯める場所として生かし、自然本来の健全な姿を保全することが大切です。

台地上にあるみどりは、雨水を地面にしみ込ませて湧き水をつくったり、大雨でまちが水浸しになるのを防いだりしています。低地にあるみどりは、雨水を一時的に貯めておくタンクのような役割を持っています。

しかし、地面が建物やアスファルトで覆われてしまうと、雨水が地面にしみ込まずに表面を流れてしまいます。その結果、行き場を失った水があふれ出し、まちの中で洪水(内水氾濫)が起きる危険性が高まってしまいます。

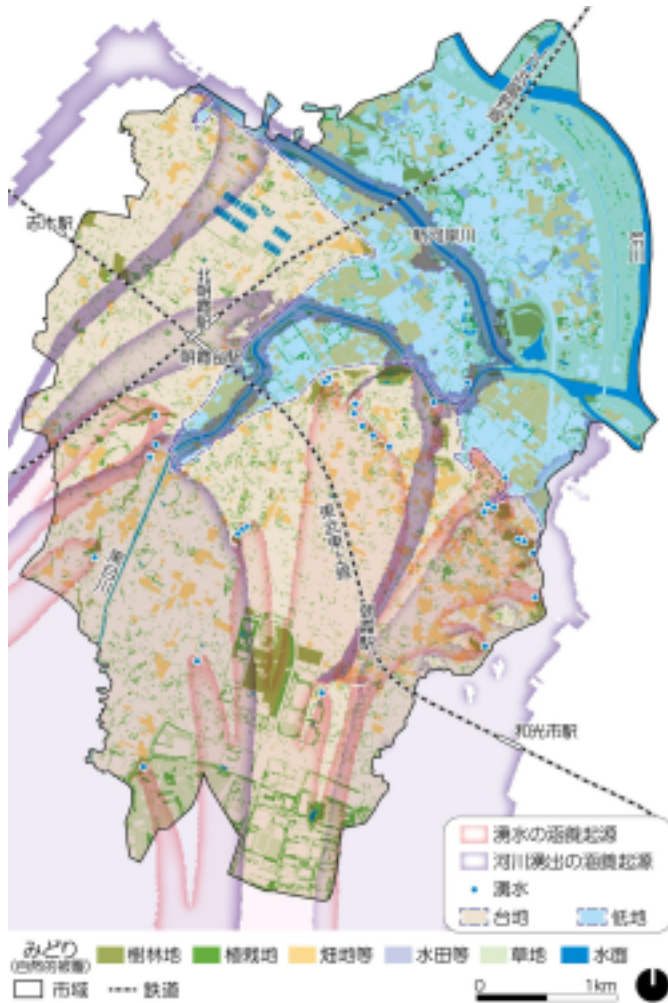


図 4-2 健全な水循環を支えるみどり

## 雨水を地下に浸透させる

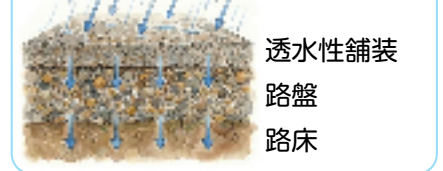
都市化によって水がしみ込まなくなった地面を、本来の呼吸できる地面に戻していくことが大切です。

### 雨庭の整備

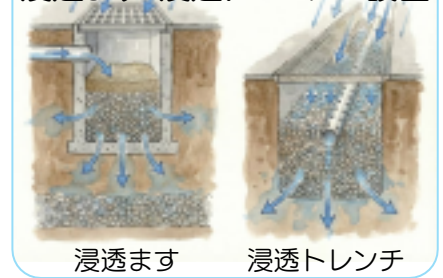


窪地に雨水が溜まりゆっくり浸透します。

### 透水性舗装の採用



### 浸透ます・浸透トレンチの設置



### 雨水浸透貯留植栽基盤材

土の中に適度なすき間をつくることで、雨水をゆっくりしみ込ませることができます。このすき間は木の根が伸びる道にもなり、木が元気に育つだけでなく、根が盛り上がり地面を壊すのを防ぐことにもつながります。

## 取組の方向性

23 涵養起源は降った雨が地下を通して特定の湧水へたどり着く「元となる場所」です。今回の調査では、降った雨(地下に浸透した雨)の1%以上がその湧水に届く範囲をシミュレーションで予測しています。

期待される効果

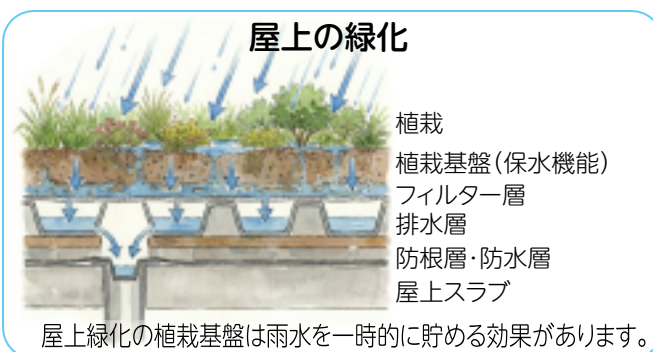
- ◆ 雨水を地面にしみ込ませ、道路にあふれる水が減ることで下水道管への負担を軽くし、浸水被害を軽減します。
- ◆ また、大地が雨水を吸い込むことで地下水が豊富になります。すると、湧き水や川底から湧き出る水が安定し、雨が降らない日でも川の水量が保たれるようになります。川の水が増えれば水質もきれいになり、魚や水草が生きやすい環境が整います。

雨水を一時的に貯める

大雨が降ったとき、すべての水が一気に下水道や川へ流れ込まないように、一時的に水を貯める仕組みをつくり、洪水のピークを小さくすることを目指します。



雨水貯留槽の設置



屋上緑化の植栽基盤は雨水を一時的に貯める効果があります。

雨水貯留碎石層の設置

調整池の整備

みどりを守る

水の循環を支えてきた大切なみどりを守り、そのはたらきをさらに強めていきます。

雨水をゆっくり地面に落とし、雨水の流出を抑え地中への浸透を助けます。



図 4-3 健全な水循環を支える取組

## (2) 都市の気温上昇を緩和するみどり

### 基本的な考え方

- ◆ この指針は、ヒートアイランド現象(熱中症などの原因となる気温上昇)を緩和するため、植物と水が持つ自然の冷却効果を生かしたまちづくりを目指すものです。
- ◆ 木陰の涼しさや、植物が水蒸気を出すことで気温を下げる気化熱のはたらき、そして急激な温度上昇を抑える水のはたらきを活用するために、みどりを守り・育てることが大切です。

駅の周りや住宅地など、建物が多い場所では気温が高くなっています。一方で、荒川や新河岸川、基地跡地など、みどりがまとまっている場所は気温が低いことがわかっています。また、黒目川や小さなみどりの空間であっても、周りより涼しい「クールアイランド」になっていることが確認されています。



図 4-4 みどりとクールアイランドの分布

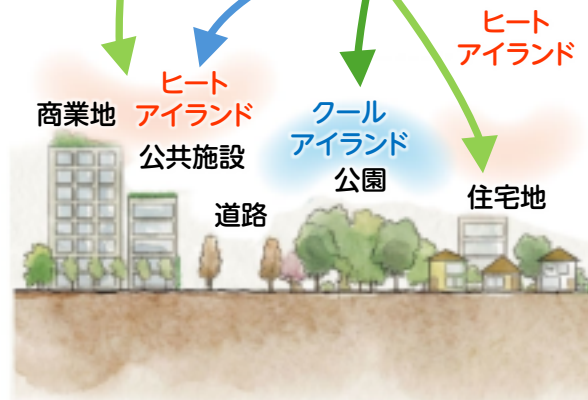
※人工衛星ランドサットによる画像より推測した地表面温度。

### みどりを守る

都市の気温上昇を抑制するクールアイランドとなっている林や水辺を守ります。

### みどりを増やす

植物を新しく植えることでみどりの絶対量を増やし、まち全体の温度が上がりすぎることを防ぎます。



### 取組の方向性

1章 計画の基本的事項

2章 みどりの現状と課題

3章 みどりの将来像

4章 みどりの指針

5章 みどりの取組

6章 地域別の取組

7章 計画の実現に向けて

参考資料集

# 1 みどりのチカラを上手に生かす指針(グリーンインフラ指針)

## 期待される効果

- ◆ 森や草木は、葉から水分を蒸発させることで空気を冷やします。また、茂った葉が日光を遮ることで、アスファルトや建物の表面温度が上がるのを和らげます。
- ◆ これにより、私たちが涼しく感じるだけでなく、エアコンの使用量が減り、室外機からの排熱を抑えることにもつながります。
- ◆ 川や田んぼなどの水辺は、温度変化が穏やかなため、周囲の急激な気温上昇を和らげる効果があります。

## みどりで効果的に冷やす

建物や地面に直射日光が当たらないように木を植えたり、熱くなりにくい舗装にすることで、温度の上昇を抑えます。

また、池や小川をつくったり、ミスト(霧)や打ち水をしたりすることで、水が蒸発するときに周りの熱を奪う気化熱を利用して涼しさをつくります。

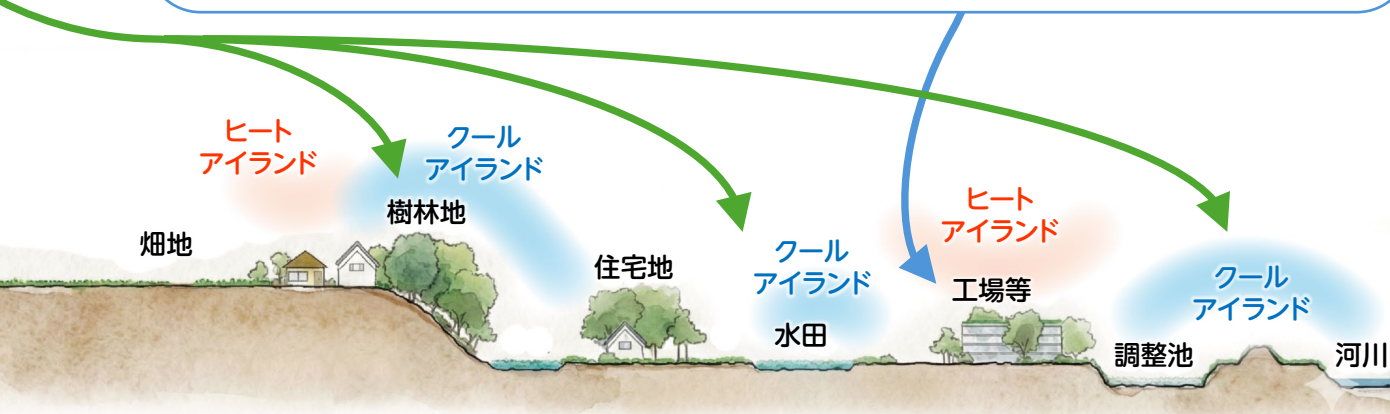
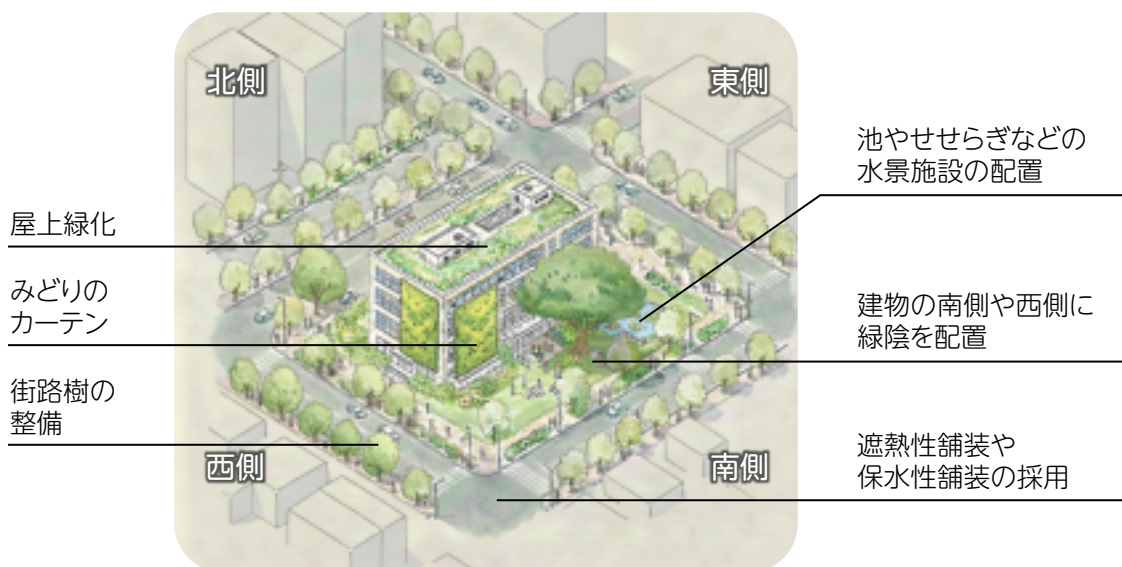


図 4-5 都市の気温上昇を緩和する取組

1章 計画の基本的事項

2章 みどりの現状と課題

3章 みどりの将来像

4章 みどりの指針

5章 みどりの取組

6章 地域別の取組

7章 計画の実現に向けて

参考資料集

### (3) 地球温暖化の緩和に貢献するみどり

#### 基本的な考え方

- ◆ この指針は、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を吸収してくれるみどりを守り・育てることで、地球温暖化を少しでも和らげることを目指すものです。
- ◆ みどりを増やすだけでなく、多様な方法でCO<sub>2</sub>を吸収・蓄積する「炭素固定」能力を高めることが大切です。

段丘崖に残る斜面林や公園等の樹林地、荒川河川敷等の草地、内間木・田島・浜崎・根岸台等に分布する農地は二酸化炭素の吸収源として大切な役割を果たしています。

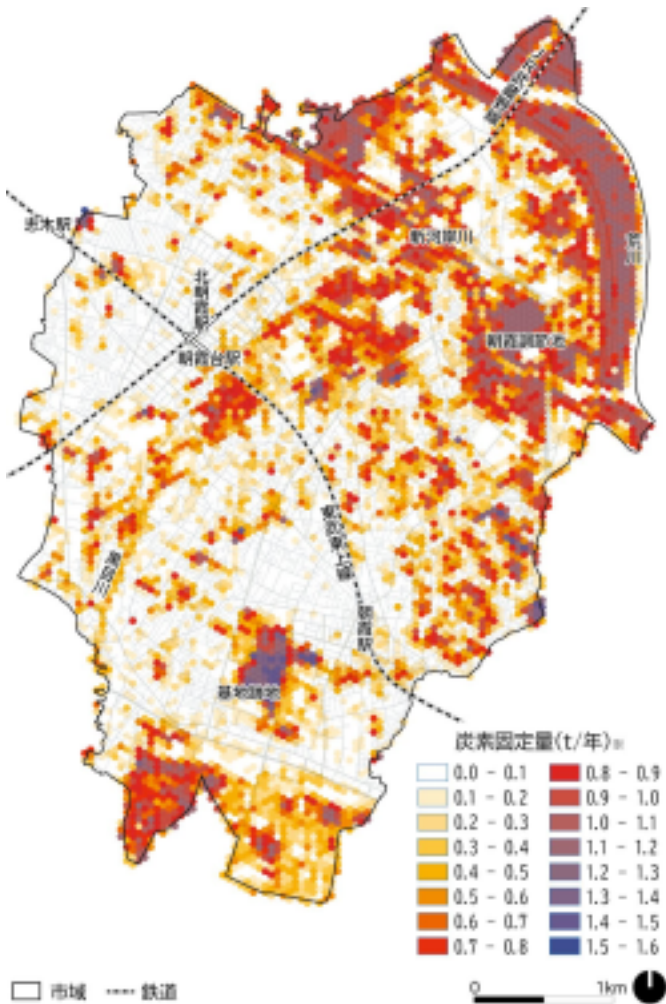


図 4-6 炭素固定量

※評価単位(面積:約 2150 m<sup>2</sup>)における炭素固定量。

#### 炭素固定に係る直接的な取組

植物が光合成によって大気中のCO<sub>2</sub>を取り込み自身の体内に炭素として蓄積(炭素固定)すること

斜面林や公園の樹木、河川敷や基地跡地の草原、そして市内に残る農地は、CO<sub>2</sub>を吸収する大切な役割を果たしています。これらのみどりは、地球温暖化の緩和に欠かせない存在です。

#### 炭素固定に係る間接的な取組

カーボンニュートラルを目指した様々な取組によってエネルギー消費を抑制し、結果としてCO<sub>2</sub>排出量を削減すること

#### 取組の方向性

1章 計画の基本的事項

2章 みどりの現状と課題

3章 みどりの将来像

4章 みどりの指針

5章 みどりの取組

6章 地域別の取組

7章 計画の実現に向けて

参考資料集

# 1 みどりのチカラを上手に生かす指針(グリーンインフラ指針)

1章 計画の基本的事項  
2章 みどりの現状と課題  
3章 みどりの将来像  
4章 みどりの指針  
5章 みどりの取組  
6章 地域別の取組  
7章 計画の実現に向けて  
参考資料集

## 期待される効果

- ◆ まちの中で育まれるみどりは、CO<sub>2</sub>を吸収する都市の肺のような役割を果たし、地球の未来を守る土台となります。
- ◆ また、みどりが増えればまちが涼しくなり、エアコンなどのエネルギー消費も減るため、私たちの暮らしがより持続可能なものになります。

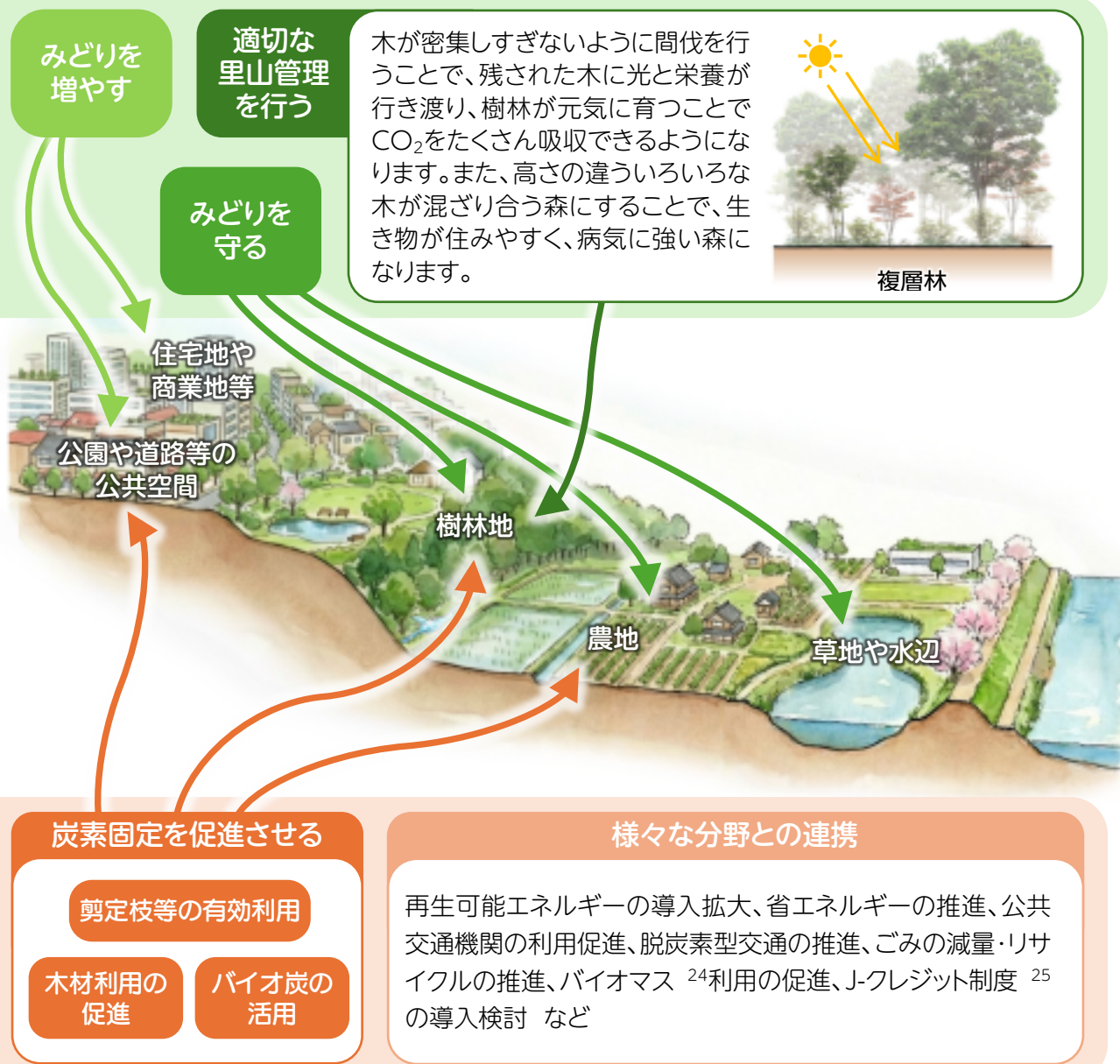


図 4-7 地球温暖化の緩和に貢献する取組

24 植物や生ごみなど、生物から生まれた資源のことです。CO<sub>2</sub>を増やさない、環境に優しいエネルギー源です。

25 J-クレジット制度は森林整備や省エネ設備の導入による CO<sub>2</sub> の削減量を、国が「価値」として認める制度です。この削減量は企業などが買い取ることができ、社会全体で温暖化対策を進めるための仕組みとして注目されています。

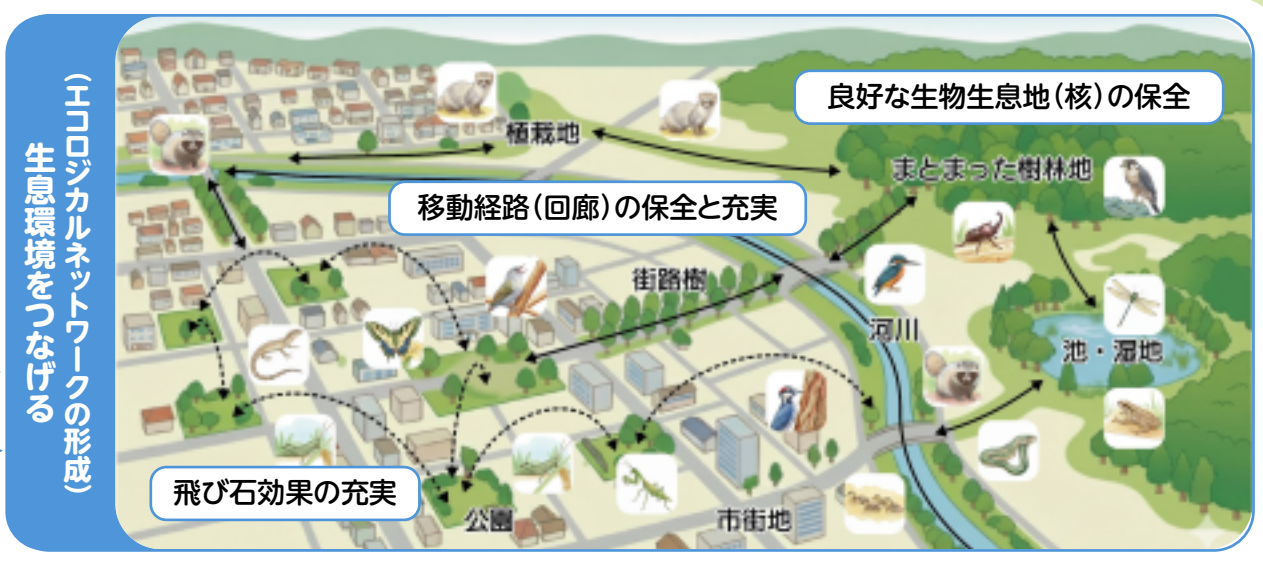


# 1 みどりのチカラを上手に生かす指針(グリーンインフラ指針)

1章 計画の基本的事項  
2章 みどりの現状と課題  
3章 みどりの将来像  
4章 みどりの指針  
5章 みどりの取組  
6章 地域別の取組  
7章 計画の実現に向けて  
参考資料集

## 期待される効果

- ◆ みどりを守り増やすことは、生き物たちのすみかを確保することです。また、飛び地のように離れてしまった自然をみどりの道でつなぐことで、生き物が行き来できるようになり、地域の生態系が安定します。
- ◆ その土地本来の植物を植えたり、森を適切に手入れしたりすることで、朝霞の気候にあった生き物が増え、それらをエサとする昆虫や鳥たちが戻ってくることで生物多様性が向上します。



### 立体的なみどりをつくる

高木層  
中木層  
低木層  
草本層  
リター層(落葉落枝層)

背の高い木、低い木、そして足元の草花。これらをうまく組み合わせることで、生き物たちにとって快適なすみかが生まれます。高い木は鳥たちの巣に、低い木は隠れ家に、草花は虫たちのご飯になります。いろいろな高さの植物を植えることで、生き物のにぎわいが生まれます。

### 異なる自然の境界をつくる

エコトーン(移行帯)  
林縁 湿地  
樹林 草原 水域

林の縁(ヘリ)や水辺など、異なる環境が接する場所(エコトーン)をあえてつくることも大切です。環境が少しずつ変化するこうした場所は、多様な生き物にとって住み心地のよい貴重な生息地となります。

### 朝霞本来の生き物を大切に

朝霞ならではの自然を未来へつなぐため、地域本来の在来種<sup>26</sup>を選んで植えていきます。同時に、生態系を脅かす外来種は「入れない・捨てない・広げない」を徹底します。特に黒目川や斜面林などの大切な場所では、市民の皆さんと協力して外来種の防除に取り組み、本来の豊かな自然環境の再生を目指します。

26 在来種とは、昔からその地域に自然に住んでいる生き物です。対して、人間が他の地域から持ち込んだものを外来種と呼びます。外来種が勢力を広げると、在来種のすみかや食べ物を奪い、生態系を壊す原因になります。

## (5) まちの景観・郷土の風景を形成するみどり

### 基本的な考え方

- ◆ この指針は、まちの景観をつくっている朝霞らしいみどりを守り育て、その魅力を未来へ引き継ぐことを目指すものです。
- ◆ 特に、黒目川や朝霞の森周辺のみどりは朝霞のシンボルであり、自然とふれあえる貴重な場所です。また、武蔵野の面影を残す斜面林や農地の風景も、失われないように守ることが大切です。

本市には、多くの人に愛される黒目川や基地跡地周辺の公園、崖線の森や田畑など、朝霞らしいみどりがあります。水とみどり、歴史が織りなすこれらの風景は、私たちのまちをつくる大切な骨格です。この貴重な景観を、未来の世代へ素晴らしいまま引き継げるよう、今ある自然を大切に守り育てていく必要があります。

本市における景観資源の評価では、市民が「豊かである」・「魅力的である」と感じる景観要素を市民アンケート調査により抽出し、その回答頻度をもとに評価を行いました。



※回答数 2 以下は省略しています。  
市民アンケート調査による「豊か・魅力的と感じるみどり」の回答数



### 取組の方向性

図 4-10 市民アンケート調査に基づく景観資源の分布

# 1 みどりのチカラを上手に生かす指針(グリーンインフラ指針)

期待される効果

- ◆ これらの取組により、朝霞らしいみどりが守られ、四季折々の美しい風景がまちを彩ります。
- ◆ 豊かなみどりの風景は、見る人の心を癒やし、健康づくりにも役立ちます。さらに、魅力的な風景の中に人が集まることで交流が生まれ、にぎわいの創出にもつながります。

## 朝霞らしい風景を守る

基地跡地の  
みどりの保全

基地跡地に残るみどりは、地域の歴史を伝える景観として残すべきものです。

河川環境の  
保全

黒目川などの河川の自然環境を守ることで、市民の憩いの場としての価値が高まります。

斜面林の  
保全

武蔵野の面影を残す斜面林を、特別緑地保全地区制度などを通じて守る必要があります。

桜並木の  
保全

重要な景観資源である桜並木は、適切な手入れや計画的な植え替えが大切です。

大きな木の  
保全

専門家による診断や補助制度が、地域のシンボルとなるような大きな木を守ります。

農地の  
保全

都市の貴重な農地を守ることが、季節の移ろいを感じられる田園風景の維持につながります。

## 潤いのある景観をつくる

都市公園の  
整備

四季を通じて楽しめるみどり豊かな公園は、地域の魅力を高めます。

街路樹の  
整備

都市計画道路などに街路樹を植えると、みどり豊かで美しいまちになります。

公共施設の  
緑化

市役所や学校等の公共施設で緑化を進めることが、地域の景観向上に貢献します。

民有地の  
緑化促進

様々な補助制度が、市民や事業者が行う自宅や事業所敷地の緑化活動を支援します。

屋上・壁面の緑化

建物の屋上や壁面を緑化し、限られたスペースでもみどりを増やすことが、景観向上を促進します。

## 癒しやにぎわいをもたらす景観を育てる

市民との協働  
による管理

市民や企業がみどりの維持管理に参加する仕組みができると、協働による維持管理体制が充実します。

散策路の  
回遊性の  
向上

点在する公園や緑地をつなぎ、散策などが楽しめる「みどりの回廊」が整備されると、まち全体の魅力が向上します。

みどりの  
専門家  
による支援

樹木医などの専門家の招へいによる講習会や現場指導の機会があると、質の高い樹木管理や景観形成に関するアドバイスを受けられます。

みどりの  
地域イベント  
の推進

桜祭りやウォーキングなど、四季折々のみどりの魅力を生かしたイベントは、市民が自然に親しむ機会となり、地域の活性化にもつながります。

図 4-11 朝霞らしい美しい景観をつくる取組

1章 計画の  
基本的事項

2章 みどりの  
現状と課題

3章 みどりの  
将来像

4章 みどりの指針

5章 みどりの取組

6章 地域別の取組

7章 計画の  
実現に向けて

参考資料集

## (6)暮らしに息づく農業活動の場となるみどり

### 基本的な考え方

- ◆ この指針は、私たちの暮らしを支え、豊かにしてくれる身近な農業を守り育てることを目指すものです。
- ◆ 農家が農業を続けやすいように支援するとともに、農業体験や地産地消(地元で採れたものを地元で食べることを進め、防災や環境保全といった農地の役割についても理解を深めることが大切です。

朝霞市では都市化が進み、農地が急速に減っています。過去 20 年間で東京ドーム約 17 個分(約 8,000 アール)もの農地が失われ、住宅地などに変わりました。農家の高齢化や後継者不足が主な原因ですが、手入れされずに荒れてしまう農地が増えていることも問題です。農地の減少は、単に農作物がつかれなくなるだけでなく、防災機能や自然環境が失われることを意味し、まちの持続可能性に係る大きな課題です。

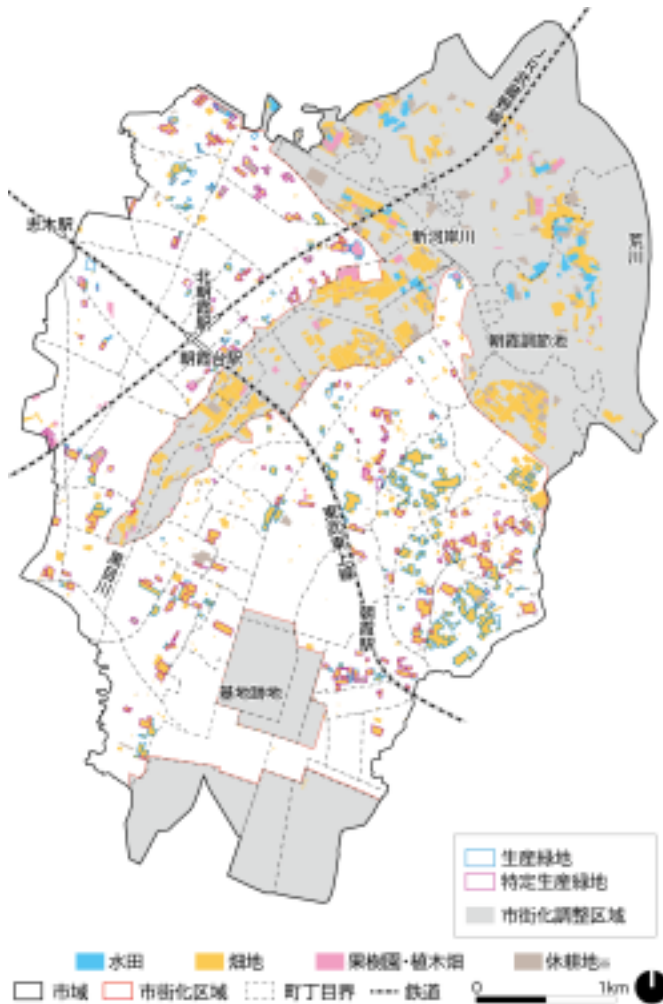


図 4-12 農地及び生産緑地等の分布

※休耕地は空中写真による目視判読のため実際と異なる場合があります。

### 都市農地を守る

農地は、新鮮な野菜をつくるだけでなく、「災害時の避難場所」「生き物のすみか」「美しい景観」「交流の場」といった、たくさん大切な役割(多面的機能)を持っています。これらを保全し、次世代へつないでいくことを目指します。

### 取組の方向性

1章 計画の基本的事項

2章 みどりの現状と課題

3章 みどりの将来像

4章 みどりの指針

5章 みどりの取組

6章 地域別の取組

7章 計画の実現に向けて

参考資料集

# 1 みどりのチカラを上手に生かす指針(グリーンインフラ指針)

1章 計画の基本的事項

2章 みどりの現状と課題

3章 みどりの将来像

4章 みどりの指針

5章 みどりの取組

6章 地域別の取組

7章 計画の実現に向けて

参考資料集

期待される効果

- ◆ 農業を続けやすい環境を整えることで、農地が将来にわたって残ります。また、市民農園や直売所での交流を通じて、地元の野菜を食べる習慣が広がり、都市農業が長く続くようになります。
- ◆ 農地が残ることで、雨水を一時的に貯めたり、生き物のすみかになったりと、都市の環境を守るチカラが向上し、豊かで災害に強いまちづくりにつながります。

## 農業を続けられる環境づくり

### 農業の担い手を育てる

農業を支えるリーダーや、次世代を担う後継者の活動を積極的に応援することが、朝霞の農業が続いていくために必要です。

### 生産緑地・特定生産緑地制度の運用

まちの中にある農地を生産緑地に指定することで、みどり豊かな都市環境と、農業のある風景を守ります。



### 使われていない農地(遊休農地)の活用

「農業をやりたい」という意欲のある人や、新しく農業を始めたい人に貸しやすくする仕組みが充実すると、使われていない農地が減ります。また、農地が見守られるようパトロールをすることは、ルールに反した使い方を防ぎます。

## 体験と学習を通じた「食」への理解

### 教育現場での農業体験

学校教育などの場で、子どもたちが土にふれたり野菜を育てたりする体験が増えることで、自然とのふれあいを通して食べ物や農業への理解が深まり、豊かな心が育まれます。



学校ファーム

### 食育の推進

「食」についての正しい知識を持ち、「食」を選択し、健全な食生活を実践する力を育むことが大切です。それが、農業の大切さを学ぶことにもつながります。

## 参加と交流で広がる地産地消の輪

### 市民農園の利用

誰でも気軽に野菜や花を育てることができる市民農園は、多くの人が農業を体験するきっかけになります。

### 農を通じた交流

農業祭などのイベントは農家の方と市民が交流できる場として地域を元気にするとともに、農業をもっと身近に感じるきっかけになります。

### 地場産野菜の購入

浜崎農業交流センターの農産物直売所や、市役所で開催される「あさか新鮮野菜市」などは、朝霞で採れた新鮮な野菜を買うきっかけになります。地元でつくられたものを地元で食べる「地産地消」を進めることは、朝霞の農業を応援し、安全・安心な食生活の広がりをもたらします。



浜崎農産物直売所



庭先販売

図 4-13 都市農地の保全に役立つ取組

## (7) 健康づくりの場となるみどり

### 基本的な考え方

- ◆ この指針は、みどり豊かな遊歩道や公園を、私たちの健康を支える健康資産<sup>27</sup>と考え、より健康になれるまちを目指すものです。
- ◆ 歩道が途切れた区間の接続や木陰の創出により歩きやすくし、まち全体の健康資産を充実させることが大切です。また、健康遊具や、植物で心を癒やす園芸療法を取り入れ、多様な健康づくりができる場を増やすことも大切です。

本市では、公園や川沿い、駅周辺の歩道が整い、健康遊具も活用されています。一方で、住宅地は歩道が途切れていたり、遊具の場所に偏りがあったりするのが現状です。今後は、市内のどこでも安心して歩くことができ、健康づくりができるまちづくりが望まれます。



図 4-14 歩行空間の分布

### 歩道をつなげる

歩道の連続性を確保することが大切です。また、川沿いの遊歩道などで車と人が交差する場所を改善すると、安心して歩けるようになります。



みどり豊かな歩道空間

### 健康イベントへの参加を促す

公園や遊歩道を活用した健康イベントは、地域のみなさんが気軽に参加できるよい機会です。



駅からハイキング  
(くろめ文化コース)

### 取組の方向性

27 健康資産は、医療サービスを指すことが一般的でしたが、近年、公衆衛生やまちづくりの分野では、「人々の健康を維持・増進するために活用できる地域にあるすべての要素」というより広い意味で捉える考え方が主流になっています。

期待される効果

- ◆ みどり豊かな歩道や健康遊具などの健康資産がまちの中に増えることで、市民のみなさんが自然と体を動かすようになり、健康になることが期待されます。
- ◆ こうした健康資産を活用したイベントやプログラムによって、楽しみながら健康づくりができることが期待されます。

まちの中の健康資産を充実させる

人にやさしい機能をつくる

木陰、照明、ベンチ、案内板などが整備され、バリアフリー化も進むと、歩くことでリラックスできる心地よい空間が生まれます。



健康づくりに役立つ公園にする

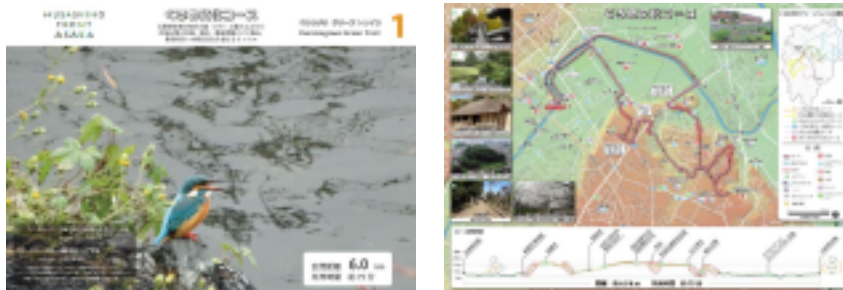
足腰を鍛えるコースや植物で癒やされる場所など、公園の施設の充実が健康づくりに役立ちます。幅広い世代が使える健康遊具を足りない地域へ設置したり、古くなったものを直したりすることも大切です。



みどりを生かした健康プログラムを充実させる

ウォーキングマップの充実

市内のおすすめ散策ルートやどこに健康遊具があるかをわかりやすくまとめた「くろめがわグリーントレイルマップ」の内容をさらに充実させることが、健康づくりにつながります。



くろめがわグリーントレイルマップ

図 4-15 みどりに係る健康資産の充実のための取組

## (8) 身近な遊び場となるみどり

### 基本的な考え方

- ◆ この指針は、朝霞市のどこに住んでいても、誰もが安全で魅力的な遊び場に行けることを目指すものです。
- ◆ 市内には公園が少ない地域があり、住む場所によって遊び場の環境に偏りがあります。しかし、朝霞市には川、神社やお寺の境内、畑などの豊かな自然がたくさんあります。都市公園に加えて、これらをうまく活用し、みんなが平等に楽しく遊べる環境をつくることが大切です。

公園が足りない地域が問題になっている一方で、市内には川や樹林地、農地などの自然が豊富です。これからは公園だけでなく、こうした身近な場所も含めて、誰もが安全に楽しく遊べる環境をつくることが求められます。



図 4-16 緑地資源の活用における公園不足域の検証

※緑地資源からの誘致圏表示には、生産緑地・特定生産緑地は除外しています。

### 今あるみどりを生かして 遊び場をつくる

#### 川沿いのスペースを遊び場にする

黒目川などの川沿いは、多くの市民に親しまれています。ここにさらに水辺に近づけたり、ピクニックができる場所などをつくと、遊び場として活用することができます。

取組にあたっては河川を管理する機関と協力しながら進める必要があります。



わくわく田島緑地

#### 神社やお寺、林を遊び場にする

地域の人に親しまれている神社やお寺の境内、雑木林などでは、こどもたちが安全に遊べる場所や機会をつくることができます。これは所有者の了承を得る必要があります。

#### 「あそびマップ」をつくって紹介する

公園だけでなく、川や樹林地など、市内のあちこちにある「実は遊べる場所」の特徴や、どんな遊びができるかを紹介する地図「あそびマップ」を作成することで、今まで知らなかった遊び場を発見したり、利用したりするきっかけになります。

期待される効果

- ◆ 新しい公園をつくることに加え、今ある自然やみどりなどの「ストック(財産)」を遊び場として活用することで、公園が少ない地域が減り、どこに住んでいても身近な遊び場に行けるようになります。
- ◆ また、川の水辺や神社、畑といった自然の中で遊ぶことは、こどもたちが自然とふれあい、豊かな感性を育てる貴重な機会になります。

身近な公園を充実させる

公園が足りない地域をなくす

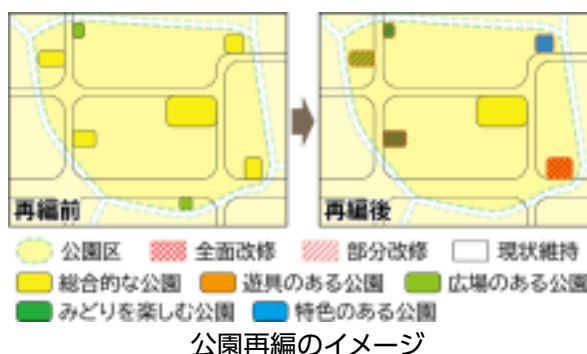
公園が遠くて遊び場に行きにくい地域において、新しい公園をつくることを検討する必要があります。また、人が多く住んでいるのに公園が狭い地域では、今ある公園を広げたり、使われていない土地を活用したりすることを検討する必要があります。建物の屋上などを利用する工夫を取り入れるなどして、人口に見合った広さの遊び場を確保することが大切です。



公園不足域に整備されたみやど公園

公園を直し、役割を見直す

古い公園や利用者のニーズにあわなくなった公園のリニューアルを検討する必要があります。また、ひとつの公園ですべてをまかなうのではなく、地域にあるいくつかの公園をグループとして考え、「ボール遊びができる公園」「自然観察ができる公園」など、それぞれの公園が違う役割を持つことで、いろいろな遊びができるように再編することが求められます。遊具や施設の管理も計画的に行い、長く使い続けられるようにすることも大切です。



公園再編のイメージ

市民みんなで遊び場をつくり、育てる

みんなの声を公園づくりに生かす

公園や遊び場を計画・設計する段階から、こどもたち自身や保護者、地域の人たちが参加できるワークショップなどを開くことで、実際に使う方々の「こんな場所がほしい」という声を、直接形にすることができます。

公園を支えるサポーターを増やす

地域の人々が、公園の掃除や花壇の手入れに参加できる機会をつくることで、自分たちの遊び場としての愛着を育みます。また、地域の団体が遊びのイベントを企画・運営することを支援すると、遊び場がより活発に使われることが考えられます。



NPO 法人あさかプレーパークの会

図 4-17 身近な遊び場の充実に係る取組

## (9) にぎわいや交流の場となるみどり

### 基本的な考え方

- ◆ この指針は、市内にあるみどりの空間を使って、みんなが集まり、交流できる場所をつくることを目指すものです。
- ◆ 公園や緑地、広場など、身近な場所をもっと使いやすくすることで、そこで遊んだりイベントを楽しんだりする人を増やします。そうすることで、地域の人同士のつながりを深め、まち全体を元気にすることが大切です。

本市には朝霞の森や黒目川など人気スポットがある一方、広場が足りない地域があります。そのため、今あるみどりの空間を工夫して活用し、人々が交流できるような場所を増やしていくことが求められます。



図 4-18 にぎわい創出に寄与する緑地等の分布

### 取組の方向性

#### みんなで作るにぎわいの場

##### キッチンカーで みどりの空間をにぎわいの場に

シンボルロードを中心に、市内のオープンスペースへキッチンカーが出店しやすい仕組みづくりが求められます。



##### イベント開催をサポート

彩夏祭のような大きなお祭りだけでなく、市民や商店街による小さなマルシェなどが開催されると、日常的なにぎわいが生まれます。それには開催しやすい環境や手続き方法にすることなどが大切です。



##### 農家と市民をつなぐ

畑や直売所を収穫体験などの場として活用することで、農家と市民の交流が深まります。また、広場などで野菜マルシェ(市場)を開くことは、地元野菜に親しむ機会になります。